自分で描く世界

L工校高等部二年　柴田奈々枝

突然貴方の目の前に老人が立っていた。その老人はだいぶ歳をとっているのに、彼は針の様にしゃきっと背筋をのばしているのだ。それにどこか満足そうに微笑みながら口開き、貴方にこう聞くんだ、

「貴方にとって人生とは何か」と。

人それぞれの答えは同じだったり違ったりする。簡単に言えば答えは一つだけではない。貴方ならどう答える、人生の事を。私の場合は人生は映画、物語そのものだ。

「失敗することは生きている証しだ。」

とある方が言ったではないか、一人生には失敗がないと人生を失敗するⅠと。まったくその通りだ。失敗というのは皆の中にある教師なんだ。名付けて失敗先生。反省して、何が悪かったのか、駄目だったのかを見つけ出し直す。他人の失敗を見て学習するのもよい。失敗するのが怖いから何もしないということ

逃げていると同じだ。誰もが完璧ではない。

完璧な人なんてどこにもいないんだ。影で努力しているだけ。この世の全ては挑戦なのだ。失敗し続けろ、そして恐れるな。失敗をすることは決して恥ではない。

挑戦と言えば、私達の周りには色々な問題が宙に舞っている。要するに誰もが何かしらの問題で頭を悩まされている。学校や職場、人間関係や家庭など人それぞれ悩みを抱えている。そこで皆さん、一回想像してみよう。貴方の目の前に壁がある。その壁の向こう側には貴方の好きな人、食べ物や欲しい物、幸わせ、叶えたい夢がある。ここで問題、貴方はこの壁の外へ行くために何をする。壁を登るか破壊する手段もあるし、諦めることも出来るよ。ついでにこの壁は色んな問題がつまっている。その問題を一つ一つ解かなければとすら不可能。面倒だから何もしないで降参する。もしそうであるなら分からないところ

は分からないままにする。自分に自信がないということだろうか。

この問題は人生の事を指しているんだ。ドラえもんがのび太君に放った台詞「いくら夢の世界に逃げても覚めたらみじめになるじゃないか！もっと現実世界でがんばらなくちゃ」。嫌でも思い知らされる。いつまで逃けても嫌な事を少しで理解することが必要である。苦しい事があるなら立ち向かって強くなれ。独りで包え込むな、きっと誰かが貴方の助けになりたいと願う人がいるから。やる前に結果などを考えるな。今をがむしゃらに生きてけばいいのだ。何故なら壁の向こう側では未来が待っているのだから。例えどんな結果であろうとも、いずれ生きていれば何かいい事が起きる。どんな困難が待ち伏せしても、めげずに立ち向かう「君」は最高にかっこいいよ。

映画の主人公達は皆これら乗り越えて強く、

たくましくなった。皆は最初、強いわけではない。最初から弱かったんだ。様々な困難に出会って成長してきたんだ。自分を変えたいと願いながら努力と共に強い人になった。私達皆は主人公だ。物語を初めさせるのも、終わらせるのも私達次第なのさ。

後悔してもいい、誰もが必ずすることさ。躓いても大丈夫。誰かが貴方に手を差しのべてくれるから。泣いてもいいし、休んでも誰も怒らないから。だって偉大なナポレオンが言ってたよ「人生という試合で最も重要なのは休憩時間の得点である」。でも休みすぎるのはよくないぞ。ナマケモノになってしまうから。

こんな綺麗事ばかり書いている私だが、決して私はこういう人間ではない。どちかと言えば正反対と言うべきだろう。でもこんな人になりたいと思っている。最後にこれを読んでいるあなた方に。

「貴方にとって人生とは何ですか？」

私の答えは「人生は自分で描くもの。」自分だけの世界、色、そして世界で一つしかない絵画」。



20×20

ホセ・フェルナンデスがこの世を去った日

W校　高等部一年

福島　大朗

今年の九月二五日は僕にとって、いや、全てのスポーツファンにとっても凄く苦しい日でした。マイアミ・マーリンズのエース、ホセ・フェルナンデス投手が乗っていたボートが午前三時ごろ、マイアミの海で高速で岩に激突し、他の二人と供に、二四歳という、とてつもなく若い年齢で命を落としてしまったのです。僕は、周りの人には分からない苦しみを感じました。

六歳の時に野球を生半可な気持ちでなんとなく始め、今に至るまで野球を続け、毎日野球情報をチェックし、日本のプロ野球からメジャーの大舞台で活躍している選手まで、すべてを知り尽くしてきました。この毎日の経験から、野球に対する愛が徐々に言葉にできないほどのレベルになりました。学校ではいろいろな友達と野球のことを語り合っていま

すが、自分と同様の愛情を持っている人は見つけられていません。野球は好きでも、それに加えバスケ、アメリカンフットボール、サッカーなど、他のスポーツも好きでそれに集中している人は多数います。しかし僕にとって野球は全てです。他のスポーツがあろうとなかろうと同じだと思っています。それだけ野球は僕の中では欠かせない、最高のスポーツだと思っています。

そのスポーツを最高の大舞台で、最高級の成績をだし、素晴らしい将来が待ち受けていた人が、突然この地球のどこにもいないということを知った時は人生で初めて言葉を失いました。何度も夢だと願いました。会ったこともないし、血も一切繋がっていませんが、ホセの偉大さは僕も良く分かっているつもりです。フィールド外でも、あの人は尊敬に値する人でした。

キューバという、とても虐げられた国で生まれ、才能が認められ、一五歳の若さでアメ

リカの大地に足を踏み入れたのです。しかし、それまでの苦労は想像を絶するものです。三度亡命に失敗し、刑務所に服役しました。そして四度目でようやく成功したのです。この若さで諦めない精神は、それまでメジャーの舞台に来ることが難しかったキューバ人にとっても、凄い影響を与えました。

さらに、アメリカに来る間の船で、誰かが船から落ちたことを聞いたホセは、誰が‘落ちたか知らずに迷わず助けに行ったのです。その助けた人物が実は、ホセの母だと知らずに。それだけホセは人間的に尊敬できて、自分の命を危険にさらしても他人を助けるという精神を持っていた男だったのです。

そんな人が、よくある怪我とは違って、死という何も変えられない悲劇にあってしまい、世界中、特にホセをヒーローとみていたキューバにものすごい悲しみを与えました。僕は、初めて、死の恐ろしさを感じました。まだ人生において、僕がよく知り、本当に大事だな

と思った人がこの世を去るということは経験したことが無かったので、今回の件は僕と同じような野球マニアでなければ分からない、恐怖を僕に与えました。

　このことは一生忘れてはいけないことだと思います、スポーツ選手だとしても、有名人だとしても、ともに息をし、立っている地は普通の一般人とは変わらないので、いつホセのように悲劇が起こるかわからないので、毎日を大事に過ごし、次の日、息をしていることのありがたさを教えてくれたと思います。

　もうすぐにホセの死から一ヵ月が経ちますが、まだ誰も忘れていないと思います。いろいろなスポーツで、ホセの偉大な背中を見た時に見える、１６の番号を選手が試合で着たり、１６の付いたグッズを飾ったり、ホセが残した絶大なインパクトがいつまでも残り、忘れ去られないようにしています。今後ホセが残してくれたものを何一つ無駄にしないために、これからも野球への愛情を捨てずに、

次に何が起こるか分からない、たった一つの人生を無駄にしないように、一日一日、生きているありがたさを忘れずに、精一杯生きていかなければならないと思います。

２０１６年の「１６」はホセの「１６」として、いつまでもホセは僕以上に、すべての人の心の中で生き続けて欲しいです。

夏休みの経験（２０１６年）

中等部三年　三井大輝

スポーツ、音楽、ヘアスタイル、三つの大きな変化を決めたのは僕自身。現地校の中学校を六月に卒業した僕にとって変化の多い夏となった。中学校の間、僕は、勉強やスポーツ、オーケストラや補習校、それに遊びも思いっきりやりきった。悔いはない。しかし、小学生の時から続けてきた生活のリズムにあまり大きな変化はなかったと言える。だから高校に進学するこの機に新しいことをやってみたくなったのだ。

まず、五歳から九年間やってきた野球を辞めることに決めた。毎年、春、夏、秋と三シーズンに渡ってプレーをしてきた。ホームランも打ち、完封試合も投げた。スランプで辞め

た訳ではない。美味しいご飯をお腹一杯食べて満足して、今度はデザートに行きたい、そんな気分だったのだ。十分楽しい思いをしたからこそ、また違う世界での楽しみを見つけたい気持ちになった。そして野球の代わりにという考え方ではなく、新しく趣味としてテニスを始めた。勝つためのスポーツではなく、自分の体調を整えたり、人と時間を楽しんだりするためのテニスだ。同じスポーツを長年やってきたので、初心者の経験は久しぶりだった。新鮮だが、長年培った野球のスィングがテニスのスィングを邪魔して思うように打てないこともある。どこまで上手になるか分らないが、とにかく新しい趣味と生活リズムを楽しもうと思う。

音楽の面でも変化があった。学校のオーケストラでコントラバスを五

年間弾いたが、それも辞めて今年の夏からチェロを習い始めた。コントラバスは大きい上に、演奏者が少ないのでコンサートでは目立つ楽器だ。しかし、出番が少ない分、特別に練習をしなくてもどうにかなる。僕はコントラバスの音色が好きで続けてきたが、一生懸命頑張らなくても弾けてしまう曖昧さから抜け出して、もっと真面目に練習をしなくてはついていけないチェロに挑戦することにした。仲間に比べると五年分遅れている。だからこそ、今年の夏は頑張って練習した。コントラバスとチェロはスペイン語とポルトガル語の様に似ているだけに返って指使いがごちゃごちゃになってしまうこともある。コントラバスなら上手に弾けるのにチェロは初心者なので、特に高音は聞き苦しい音も出してしまう。

でも新しい楽器に挑戦して、上手に弾けるようになった時の喜びを想像して、頑張っていきたい。

三つ目の変化は髪の毛だ。今まではスポーツ刈りが多かったのだが、一度髪の毛を長く伸ばしてみようと思いたった。できれば侍の様に束に結べるぐらい長くしてみたい。これには深い理由はない。単純に自分のイメージを変えてみたいのだ。髪の毛を伸ばす間、どこまで中途半端な長さが我慢できるか分からないが、ある意味これも一つの挑戦といえる。

色々な変化に挑戦した夏だったが、バスケットボールだけは今まで通りに続けるつもりだ。チョンマゲのスーパーシューターとなった自分を想像してみると楽しくもある。

私のいとこ

L－校中等部二年
滝澤　真佳

「まかちゃん、手つなご。」

と言ってとい君はいつもギュッと手を握ってきます。近所に買い物に行くときは、必ず私がとい君と手をつないで歩きます。そして大好きなプリキュアの変身する時のセリフを叫びながら歩くのです。あまり人通りはありませんが、周りに声が響きわたって少し恥ずかしくなります。

とい君は、私と同じ二千三年生まれで、今年の春から中学生になりました。でも、精神年齢は小学校低学年くらいです。軽度の自閉症という病気があるそうです。学校では、特別支援学級というクラスで勉強しています。見た感じは病気があるとは全然わかりません。元気の良い男の子です。

とい君は女の子に憧れる男の子です。長い髪の毛に憧れて、自分の髪も伸ばしたい

と思っているのに、叔母さんは許してくれず、いつも美容師の叔父さんに短く切られてしまいます。

とい君は、どうしても長い髪になりたくていつも自分の短い髪に、スーパーのおそう菜コーナーからもらってきた輪ゴムでバスタオルをギュッと巻き付けて長い髪のふりをします。

そして、

「ありのままの・・・。」と歌いだすのです。

アナと雪の女王のエルサになったつもりです。

私たちはそんなとい君にいつも大笑いして、毎年とても楽しい夏の日々を過ごしています。

そんなある日、とい君は夏休み中の部活動に行くことになりました。とい君は報道部という部に所属しています。学校の新聞を作ったり、給食の時間に放送したりする部だそうですが、夏休み中はマラソンをしたり、体力作りもするそうです。

朝、出かけるときにとい君は少し不安そうな感じでした。とい君は何か新しいことがある

と不安になって、耳に指を突っ込んだり、目をつぶってパチパチしたりして落ち着きがなくなります。
私は、とい君と学校に途中まで一緒に行ってあげることにしました。
「とい君、一緒に行こうよ。」と言うと、とい君は、
「ほんとに。じゃ、手をつないで。」と言ってまたギュッと手をつなぎました。いつもより強く感じました。
大きな池を囲んだ道を進んで曲がり角で止まりました。
「いってらっしゃい。」
とい君は眉毛を八の字にしてトボトボ歩いて行きました。
家に戻ると母が心配そうに、
「とい君大丈夫だった？」と聞きました。私は、うんとだけ答えて八の字のことは言いませんでした。
それから三十分くらいした時です、

「たっだいまー。」と大きな声でとい君が帰ってきました。
「えっ、早くない？」と母がびっくりして言いました。とい君は先生に帰っていいといわれて帰ってきたそうです。
とい君はドキドキしながら行った部活でしたが、すぐ帰ってこれて安心したのか、眉毛が元に戻っていました。
夕方、叔母が仕事から帰って、今日の部活の事を話しました。叔母は、もしかしたらとい君が緊張して、勝手に帰ってきたのかもしれないと、先生に電話をすることにしました。先生は、部活は生徒たちだけで活動するので、とい君がいると大変になるからというような内容だったそうです。
叔母は、とい君は普段特別支援学級で学校生活を送っているので、部活動を通して同学年の生徒さんや、先輩とも交流が持てればいいなと思い先生にお願いして報道部に入れてもらったそうですが、他の生徒さんに迷惑がか

かるようでは仕方ないと、あきらめていました。

　とい君は時々おかしな事をしたりするけれど、だめと言ったことは守るし、宿題をやるときは、今日はここまでと言うと必ず終わらせます。

そういうことを周りのみんなにもわかってもらえれば、もっと色々な人と交流できるのにとおもいました。

　どんな障害でも、理解を深め、みんなが助け合って生活できれば、眉毛が八の字にならない日がくると思います。

「あきらめないことの大切さ」

W校中等部一年二組
堀内恵理奈

二〇十六年のこの夏、私は「スケートのスキルをもっと磨きたい」という思いから一週間にわたり「フィギュアスケートキャンプ」に行った。そのキャンプは最終日に「グレイシーゴールド」という有名なアメリカ代表のオリンピック選手が来てくれる、というものだった。さらに私にはこの夏どうしても超えたい二つの目標があった。それは、「ワンフットスピン」というクスピンを完璧にできるようにすることと、「まだ習得していないジャンプを習得する」という目標だった。

初日、最速ワンフットスピンに挑戦してみた。が、足の軸が大きくぶれてしまい転倒してしまった。その後も何度もコーチに指導してもらいながら何回、何十回と三日間ぐらいにわたり練習したけれど、どれもあまりうま

くいかなかった。でも、あきらめなかった。

ジャンプは「サルコウ」というジャンプを習得することにした。最初は飛ぶことを恐れなかなか成功しなかったが、日々上達していった。

スピンについては本当にうまくいかず、「もうできないからあきらめてしまおう」とも思ったがコーチに、「このままあきらめてしまったら、もう二度とできないまま終わってしまうよ」と言われたので私は考えた。

「もう少しあきらめずに頑張ってみよう」と。

四日目、ようやくスピンができるようになった。とてもうれしかったし、達成感もあった。最終日のグレイシーゴールドが来る日、私達はキャンパー全員でのアイスショーを行うことになっていた。三日目ぐらいから練習をしていて、そのプログラムには「サルコウ」と「ワンフットスピン」も入っていた。とにかく私はそのアイスショーに向けて練習し

ようと思った。

リハーサルが始まった。まずはずっとうまくいっていなかったワンフットスピン。それは成功した。次はサルコウ。うまく飛べたものの、着地で転倒してしまった。悔しかった。

でも私は、「明日がある」と自分を信じ、もっともっと本番に向けてあきらめずに練習を重ねた。

本番が始まった。グレイシーゴールドや他の親達がみている中、私はドキドキしながらただただ曲が始まるのを待った。

最初は音楽に合わせてステップとダンス。それらは全てうまく成功した。スピンも成功し、一安心した。最後はリハーサルで失敗してしまったサルコウ。

成功した！

とてもうれしかった。私はその時満べんの笑みと同時に思った。「最後まであきらめずに努力をして良かった！」と。

私はこの夏、「あきらめないことの大切さ」を学んだ。それと共にスケートも確実に上

達した。

これからも、「あきらめず、努力をすればどんなことも乗り越えられる」ということを忘れずに頑張っていこうと思う。



20×20

ベートーベン

L工校　中一年一組
猿見田　美星

ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーベンは歴史上最も偉大な作曲家と言われています。しかしその生涯は決して楽なものではありませんでした。どんなに困難な状況の中でも彼の音楽に対する情熱は決して失われる事はありませんでした。

ベートーベンは一七七〇年一二月一六日頃、父ヨハン、母マリアの長男としてドイツのボンに生まれました。この夫婦には六人子供がいましたが、成人まで生きたのはベートーベンとニコラス、キャスパーの二人の弟だけでした。

ベートーベンの父も祖父も宮廷音楽家でした。ベートーベンも四歳からバイオリンとピアノのレッスンを始めました。父ヨハンはベートーベンをモーツァルトの様な神童に育てようと無理な練習を強要しました。毎晩酔っ

て帰って来ては寝ているベートーベンを起こして練習させたり、連れて帰った友人の前で演奏させたりしました。ベートーベンは七歳の時最初のコンサートを開きましたが、モーツァルトの最初のコンサートが六歳だったため、父ヨハンはベートーベンの年も六歳と偽りました。

ベートーベンが十二歳の時、ようやく父ヨハンから解放され、クリスチャン・ネーフェにピアノと作曲を習い始めました。ネーフェのもとでベートーベンは実力を伸ばし、彼のすすめで十七歳の時ウィーンに行きますが、わずかその二週間後、母マリアの急病のためボンに戻ります。しかしマリアは亡くなり、数か月後に幼い妹もなくなりました。ベートーベンは酒のため刑務所に入っていた父の代わりに弟二人を育てることになりました。

一七九二年、弟達がほぼ成人したところでベートーベンは再びウィーンに戻り、ハイドン、サリエリの元で作曲を学びました。彼の

ウィーンでの最初のコンサートは大成功に終わりました。ベートーベンは貴族の娘たちにピアノを教えながら作曲を続けます。しかし、一七九八年頃から聴覚のおとろえを感じる様になり、様々な治療や補聴器を試しましたが、聴覚は衰える一方でした。絶望したベートーベンは一八〇二年ウィーン郊外のハイリゲンシュタットで弟達あてに遺書まで書きました。しかしその後も音楽に対する情熱は失わず作曲を続けました。耳はどんどん悪くなり、一八一八年には完全に聴覚を失います。それでも彼は作曲を続け、一八二四年の交響曲第九番の演奏会では大成功を収めます。

一八二五には体調を崩しながらも交響曲第十番の作曲に取り組みますが、一八二七年には起き上がることも出来なくなり、三月二六日の夜、庇護を受けていたブロイニング家の人々に「諸君、喝采したまえ、喜劇は終わった」と言って亡くなったと伝えられています。

ベートーベンは生涯結婚することはありま

せんでしたが、一八一二年、チェコ共和国のプラハを訪れた際、テプリツという町に立ち寄っています。これは彼が特別な女性に会いに行ったためだと考えられています。彼はその女性を「不滅の恋人」と呼び、その年、三部からなる十ページに及ぶラブレターを書いています。しかし、この手紙が投函されることはありませんでした。手紙は彼の死後に見つかりましたが、女性の名前が手紙のどこにも書かれていなかったため、多くの研究にもかかわらず、この女性が誰なのかは今でも分かっていません。

ベートーベンは生涯で九つの交響曲、三十二のピアノソナタ、五つのピアノ協奏曲の他多くの作品を残しました。彼は音楽家として聴覚を失うという絶望的な状況に陥りながらも不屈の精神で作曲を続けました。そして聴覚のない人が歴史に残る数々の名曲を作ったという前代未聞の偉業を成し遂げたのでした。

未来がよりよくあるために

W校 六年一組 青木さくら

日本では今、少子化や高齢化が問題になっている。今、子供の数が減ればこれから未来を成り立たせていく人々も減るという事だ。また定年退職でお年寄りが仕事を辞めた事によって職に就いている人々も減るという事がおこっている。日本の未来が少しでもよくあるために政府はルールを改善する必要があると思う。

少子化の理由として挙げられるのは、働く女性が、仕事と子育ての両立がしにくいという事である。なぜなら最近は保育園などのしせつに子供を入れる人々が増えているため、このようなしせつは、人数制限を超えてしまいこれ以上、人々を受け入れる事が出来なくなってしまっているのだ。このような事が起こる訳は日本の制度がきちんと整っていないからと言える。

そこで私はあるサイトで世界一子育てをし

やすい国について調べてみる事にした。その国に選ばれたのは、フィンランド、ノルウェー、スウェーデンなどの北欧勢の国ばかりだった。私はこれらの国と日本の違いを調べてみた。その結果分かったのは医療費、教育費は小学校から大学まで基本無料だという事だ。また保育園や幼稚園は有料だが経済的に余裕のない家庭には補助金が出るという事だ。それに対して日本は小学校から中学校までが義務教育のため、高校から、大学までのお金は一切出ないし、まだまだ子供をあずかってくれるしせつが整っていないためにどんどん少子化が進んでいってしまうのである。

また日本では、高齢化社会も、問題になっている。お年寄りが長生きする事になったのはすばらしい事だが、それを支える若者の数が減っている。働いている人が減るのは、けっして良い事とは言えない。なぜなら、老人の福祉にかかる費用がまかなえなくなるからだ。高齢化社会の要因は大きく分けて、平均

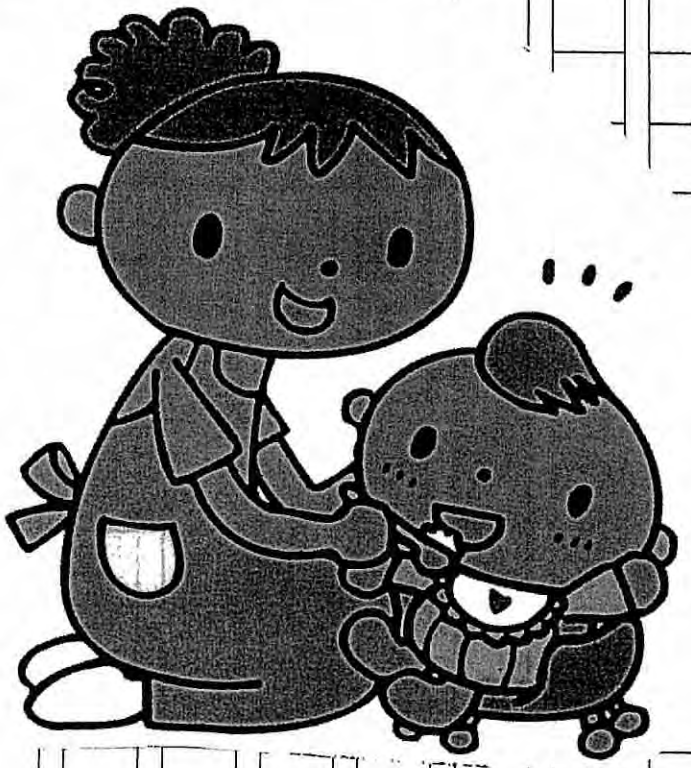
寿命の延伸による65さい以上の人口の増加と、少子高齢化の進行による若者の減少である。この問題を解決する方法について調べてみた。

これには主に二つの策がある。第一に、地域での助け合いだ。介護サービスには、税金がかかるし、人数も足りていない。そこで、地域の若者がお年寄りの生活の手伝いをすることによって少しでもこの状態がよくなるだろう。次に若い人への知識や技術を伝えていく事が大切だ。これからますます若者が減ると、今までの日本人が長い間持ってきた、知識や技術も失われてしまう。そこで今のうちに高齢者が若者にしっかりそれらを伝えていく事が重要となる。そうする事によって高齢者にも、生きがいが生まれるかもしれないし若者にも新しい道が生まれるかもしれない。

最後に、子供を生み、育てやすい社会を作る事だ。これが一番難しいだろう。これを実現するには住環境、若者の給料、女性の働きやすさ、保育所の確保、医料費、学費などのあ

らゆる面での改革が必要となるだろう。

果たして、未来の日本では、これらの問題が解決し、国民の多くが幸せだと言いきる事が、出来る時代になっているだろうか。



20×20

忘れられない思い出

L工校　六年二組
サリバン　光博

七月二十九日、友達と外で遊んでいると、急に救急車のサイレンが聞こえてきた。

「この救急車はどこに行くんだろう。」

と友達と話していたら、サイレンの音が近づいていた。

気づくと、救急車はぼくの家の前に止まっていた。ちょっと不安を感じた。

「あれ、どうして救急車が・・・。」

バタンッ！と音がして、救急車の後ろのドアが開くと、五人位の救急隊が飛び出して、家の中へと入って行き、二階へと上がっていった。

そのとき僕は気づいた。ばあば、つまり僕のおばぁちゃんを助けるために上がっていったのだと。ばあばはその日、具合が悪くて、寝こんでいたのだ。そして、ばあばは大きな座布団のようなクッションに座って四つ角を

救急隊にしっかり持ってもらい、丁寧に降ろされた。まるで、救急隊がクマを運んでいるような感じで、そのときはつい笑ってしまった。僕は、ばあばは、ただ熱を出していただけですぐ帰って来るだろうと思っていた。

ばあばのいない日々を一言で表すと、

「さびしい」。

いつも当たり前のように昼起きたら、ばあばが笑顔で、

「おはよう」。

と言ってくれたのに、ばあばのいない昼は、ただコーヒーを取りに来たおじいちゃんの怖い顔を見なくちゃいけなかった。しかも、おじいちゃんは、

「おはよう」。

とか

「夜よく寝れたマ？」

とかも僕に聞かずに、だまってコーヒーを取って去って行く。おじいちゃんは笑うと怖くないからもっと笑うといいのに。そして、普

段は、ばあばの天使がしゃべっているような優しい声に起こされていたのだが、ばあばのいない間は母とおじいちゃんのけんか声で起こされなければならなかった。いつもはにぎやかで明るい家が、ばあばがいないだけでまるで地獄のようだと感じた。

ばあばが入院してから数日後、僕はもうこんな生活はやだと思い、母にそう言った。だけど次に母がこう言ったことで僕は言葉を失った。

「ばあばは、私たちがアメリカに帰るまでには退院できないかもし。

これを聞いて、涙が出てきた。僕はだまって泣きながら和室へと向かった。ふとんの上で寝ころがって、まくらの中に自分の顔をうずめて、泣いた。大きな、大きな声で泣いた。

「ばあばともっと時間を過ごしていたらよかったのに。もっとばあばとやりたいことがあったのに。」

と思いながら、僕はいつの間にか夢の世界へ

と入っていった。

お母さんはほぼ毎日病院へ行っていたが、僕は、ばあばはすぐ帰ってくると思っていたので、のんびりと朝寝ていたりして、五回位しか病院には行かなかった。ひどい孫だったと思う。そして、病院に毎朝行かなかったことを今でも反省している。でも僕は、和室の仏壇と神だなに毎晩寝る前にばあばがよくなるようにと祈っていたんだ。

やがて二週間過ぎてばあばが一時退院できると聞き、うれしくてたまらなかった。そして、僕のたん生日の二日前にばあばは退院し、僕のたん生日をいっしょに祝って、ケーキを食べてくれた。うれしかった。僕はその日はずっと笑顔だった。

その後僕たちはアメリカに帰ってきた。僕は今日もまだ治っていないばあばが早く回復するように祈っている。

未来の社員へ

W校　六年一組　金子　翔太

ぼくは、プライベートも仕事も両方大切にするということが、よりよい未来への第一歩だと思います。

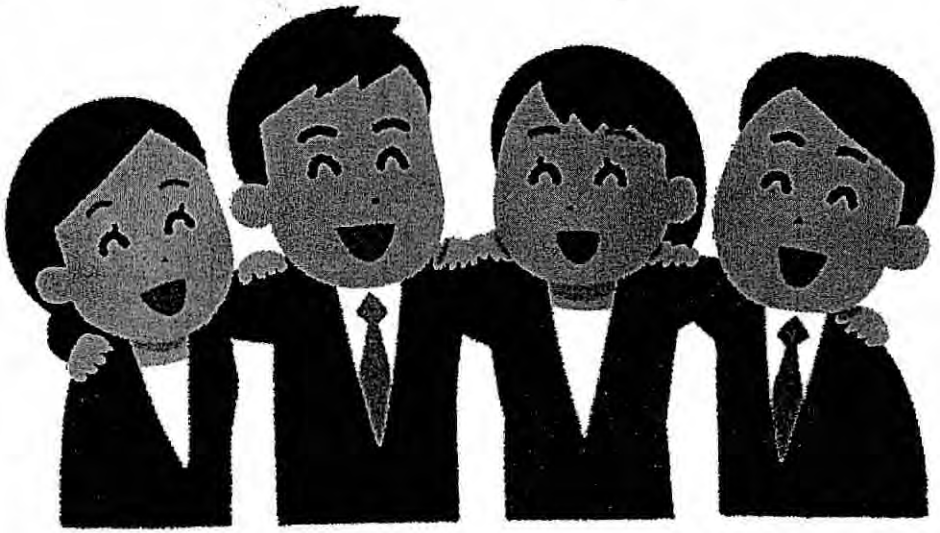
ぼくは、子供ニュースで、ブラック企業という従業員に長い時間働かせ、休ませず、しかも給料が安いというように従業員を物のように使っている会社があるということを知りました。自分の会社がこのようなブラック企業だと思っている人が今、四人に一人いるそうです。このような働き方がふさわしいとはぼくは、思いません。国も、このように従業員に働かせると、病気になる人が増え、企業も人手不足になるので、ワークライフバランスという、プライベートも仕事も大切にし、よりよく生きていくという考えを広めていこうとしています。

さて、みなさんは、「そんな会社、やめればいいじゃないか。」と考えたりは、しません

か？たしかに、やめることは、可能です。しかし、生活や家族のことがありやめられない人もいるので、そう簡単には、やめられません。他にも「好きな仕事なら、つらくても良いでは、ないか。」と思いませんでしたか？ぼくは、最初、ブラック企業について知った時そう思いました。好きな仕事なら少しつらくても、たしかにがまんできると思います。しかし、好きなことを仕事にできなかった人はつらい気持ちの中、好きでもない仕事をやらされているので、少しいやなことがあっただけですぐいやになってしまいます。

今、日本には、「会社の成長のためなのなら、家族や友人とともに過ごす時間をけずってもよい」と考えている社会人が70％もいます。こんな仕事のし方は、おかしいと思います。なぜかというと、家族といっしょにいる温かい時間が一番大事だと思うからです。アメリカのお父さんは、早めに帰ってきて、子供たちと遊んだりしています。ぼくのお父さ

んも、夕飯の時には、帰ってきます。このように、仕事とプライベートを大切にし、家族といる時間を増やす、ワークライフバランスを大切にするということがよりよい未来につながると思います。



アメリカ最高の思い出

W校　五年三組

市部　夏央

私はこの夏休みに初めて一人で飛行機に乗りました。いつもはとなりに両親が一緒にすわっていたのに、今回はいません。今回私は八才から十六才合わせて十三人の子どもたちと二人のコーチと一緒にフロリダへ行きました。一週間テニスキャンプのためにフロリダに行って女の子たち四人と一緒に泊まります。今回は私より年上の子も参加していたので少し安心していたのですが、やっぱり心配でした。

当日、朝四時に起床し最後の準備をします。四時三十分、私は両親と一緒に車に乗って出発しました。私の家に帰ってくるのは一週間後。大丈夫かなぁ、心の中で思いました。そして空港に着いて両親とも別れました。これから一週間は一人です。私は二人の女の子と飛行機に座りました。初めての一人での飛行

機に乗って出発！地上がどんどん遠くなり気がついたら雲の上でした。私は飛行機の中でお友だちとおしゃべりをしたりして長い五時間のフライトを無事終了することができました。みんなで飛行機をおりて、"楽しかったね。""景色がきれいだったね！"と話したりしながら歩いていました。

ここからは、二組に分かれて行動します。私たちは、泊まる場所に先に行くチームに入りました。車でおよそ一時間、みんなでわいわいさわぎながら到着！ここで三時間ぐらい待つ予定になっていました。ちょっとお散歩をしてゆっくり場所を覚えたりしながら、みんなを待ってついにみんなが揃いました。明日からアメリカ人たちと本格的なテニス練習が初まります。それにそなえてこの日は早めに就寝しました。

翌日、朝起きてまずは朝食を食べに行きます。終わったら直接コートに行き、約百五十人の生徒全員で準備体操をします。最初の日

は、レベル決めで私は大きい人たちのグループに入れてもらいました。九時から十一時までテニスで、二時間のお昼休憩の後また三時までのテニス練習がありました。その後は自由時間。みんなで遊んだり、プールをしたりして楽しく過ごしました。

このキャンプでも私にとって大イベントは私のおたん生日です。私は何も知らないままテニスの練習が終わり夜の八時になりました。プルルルル。コーチから電話がかかってきました。みんなでコーチの部屋に来い。コーチがものすごく怒っていると言われました。私のたん生日なのに!!と思いながら行ってみると…みんながきちんと座っています!一人一人面接をするそうです。私の番がきました。ドアを開けるとコーチが座っています。コーチと話している時に隣の部屋の電気が消えました。どうしたのかな?コーチと面接が終わりほっとしてドアを開けたら!!!パッピーバースデートゥーユー!!の歌をみんなで歌ってくれ

ました！私はすごくうれしくてしかもおどろきました。コーチが写真を撮るよと言ってなおのうしろに立ちました。そして～！ブチヨ！コーチが私のあたまを押したのでケーキに手をつっこんじゃいました。みんなは大笑い!!!ちょっといやだったけど、みんな楽しい夜でした。

こんなことをやってすぐに一週間がたってしまいました。泊まっていた所を出て、車に乗り空港まで行きます。みんなが揃い、お土産も買って荷物も預けてあとは帰るだけです。飛行機に乗ってフロリダの最後の景色を見ながら、"バイバイフロリダ！また来るね！"と心の中で言いました。

五時間のフライトの後、とうとうニューヨークに着きキャンプの時間も終わりが追ってきました。トランクを取ってみんなにバイバイと言ってこのキャンプは終了しました。この一週間であったことは一生忘れないと思います。いつもは一緒にいても絶対に話さなか

た男の子やみんなのやさしさが分かってすごく楽しかったです。毎日一緒にマラソンやごはんを食べたり部屋で電話をしたりして、どんどん絆が繋がりました。みんなで試合をやる時や終わった時もよくがんばったね！あともう少しだからがんばれ！と声をかけあったり、男女かまわずハイタッチなどをしてみんな仲良くなったと思います。マラソンでは、人をぬかす時もがんばれ。とうしろのお友だちに言ったりしました。

これからもまた一緒にこうやって行きたいです。また会える日まで、さようなら！

ぼくと初めての眼鏡

W校五年二組　小山　爽太

ぼくはこの夏から眼鏡をかけるようになりました。そして、ぼくはこの眼鏡をとても気に入っています。なぜならば、いままでぼやけていた世界が、まるで全部変わったかのような位、くっきりと見えるようになり、とてもすがすがしい気持ちになったからです。

ぼくが眼鏡をかけるようになったきっかけは、今年に入ってから母に、

「遠くの物を見る時に目を細めたり、なるべく近くで見ていない？」。

と聞かれることが増えたり、自分的にも教室の後ろの席からだと、ホワイトボードなどに書かれている文字がぼやけて見えたからですなので、夏に日本へ一時帰国する際に、眼鏡を作ろうと話すようになりました。

これが、ぼくにとって初めての眼鏡だったので、眼鏡屋さんに行く前に眼科へ行き、視力を測ってもらいました。視力検査の時間が

とても長くてびっくりしたけど、終ったら友達たちも買ったという近所の眼鏡屋さんで、作ってもらうことにしました。この眼鏡の色は黒と緑の間ぐらいの色合いで、横から見ると、緑と黄色のチェック模様があり、耳にかける部分は、自分の手で調整できるようになっていて、初めてのぼくでもい和感無く使い始めることができました。

眼鏡は、水泳の時に使えなかったり、うどんなどの温かい食べ物を食べる時にくもってしまうなどの欠点がありますが、ぼくにとって眼鏡は早くも体の一部のようになってしまいました。とても大切だなと思っています。なぜなら、最近この眼鏡がなくてとても不便だなと思うことがありました。補習校がある土曜の朝、眼鏡を外して漢字テストの復習をやったり、朝ご飯を食べていたりしたら、家を出る時にすっかり忘れてしまい、その日は眼鏡無しで授業を受けることになったのです。少し見えにくいだけではなくて、気持ち的にもと

ても落ち着かない感じがして、家に帰ったらすぐに、眼鏡を探してしまいました。やっぱりこの眼鏡はぼくにとって無くてはならない物だと思いました。

ぼくは、この眼鏡との出会いを大事にして長く使えるよう大切に使いたいと思います。もし最近教室のホワイトボードや黒板の文字が少し見にくかったり、目を細めて何かを見ている気がしたら、ぜひ一度眼科に行ってみて下さい。ぼくみたいに世界が変わったかのように感じて、自分にあった大切な眼鏡に出会えると思うからです。

最高の夏休み

ニューヨーク補習校　W校　五年二組
中村　開翔

ぼくは、この夏休み、毎日がウキウキしていました。その理由は四つあります。

一つ目の理由は、去年まで通っていた日本の学校に体験入学したことです。久しぶりに会った友達といっしょに勉強できたことがうれしかったです。家庭科ではさいほうの授業をしました。みんなはうまくやっていたけれど、ぼくは全然できませんでした。ぼくの友達は「今日の家庭科は調理実習がいいな。」と言っていました。そしてぼくもそれがいいなと心の中で思っていました。でもさいほうだったので友達はとっても残念がっていました。

来年また体験入学ができたら調理実習がしたいです。そしてプールの授業で着衣泳をしました。着衣泳はふつうにプールに入るよりも体が重く感じました。アメリカではできない貴重な体験だったのでよかったです。

二つ目の理由は、体験入学中の放課後は毎日友達と遊べたことです。アメリカでは十三才以下の子供はどこへ行くにも大人と一しょに行動しないといけないので少し不自由だったけれど、日本では子供だけでも遊ぶことが出来るので少し開放感がありました。一番印象に残ったことは四時間授業の日に友達とバスに乗って室内プールへ遊びに行ったことです。スライダーや水泳きょうそうしたことが楽しかったです。そしてプールから出た後にみんなでアイスを食べました。なぜかわからないけれど特別おいしく感じました。その時のアイスの味は今でも覚えています。この時のことを考えていたらよだれが出てきそうです。来年もまた友達と一しょに楽しい思い出を作りたいです。

三つ目の理由は、親からはなれてフロストバレーで一週間過ごす泊まりのキャンプに行ったことです。楽しかったことは、みんなで何時間もかけて枝を集めて火を起こしたことで

す。大変だったけれど火がついた時はとてもうれしくてつかれをわすれてしまいました。あとはカレーを初めて一から作ったことです。今までカレーを作ったことはあったけれど、その一部しかやったことがなかったのでカレーを作る順番をきちんと覚えられました。他にはスリープアウトというて外でねたことです。みんなで山おくへ行って山の中で一回ねました。夜中にキャンプのリーダー達がいた小屋の中にへビが入ってきたのでびっくりしました。でもリーダー達は木の枝などでつついて追い払っていました。キャンプではチームワークを強く感じました。キャンプへ行く前は行くのはめんどくさいなと思っていたけれどダラダラしていたいなと思っていたけれどいざキャンプが始まったら予想以上に楽しかったです。来年は二週間キャンプに行きたいです。

四つ目の理由は、バスケットボールのデイキャンプに一週間通ったことです。最初はお

母さんにバスケのキャンプあるけどどう？と言われて何となく申しこんでみたけれど通っているうちに熱中していました。キャンプが終わった後、ぼくはバスケがうまくなった気がしてうれしくなりました。キャンプのおかげでバスケに興味を持ったので行ってよかったです。そして本キャンプでは試合で勝てなかったのでバスケの試合をすることがあったら勝ちたいです。

ぼくは今年の夏休みは今までで一番ウキウキした夏休みだったと思います。アメリカの学校は、日本の学校のように夏休みの宿題がたくさん出ません。ぼくは、補習校に通っているので夏休みの宿題はありましたが、日本にいる時ほど多くありませんでした。なのでアメリカのイベントと日本のイベントの両方をたくさんすることができました。来年は、今年をこえる夏休みにしたいです。

補習校の宿題

NY補習授業校　W校　五年一組
伊佐山　莉里香

補習校の宿題はとても大変です。とにかく大変です。いやになるほど大変です。大変としか他に言いようがありません。

どれだけ大変かというと、宿題を全部終わらせるには、ほとんど毎日宿題をやらなければなりません。土曜日の補習校の後、宿題をしなくてはいけない時は、まだ勉強しなくてはいけないのかという気持ちになります。日曜日、朝から宿題をしなくてはいけない時は、友達はきっと遊んでいるんだろうな、私も遊びに行きたいなと思います。平日は器械体操とピアノを習っているので、空いている時間は毎日宿題です。公園にも行きたいけれど公園に行くと宿題が終わりません。

でも週に一回だけ、宿題が楽しみな日があります。月曜日だけ、スターバックスで一時間ママと一緒に宿題をやる日です。好きな飲

み物を飲みながら、ママがずっと宿題を見てくれます。いつもは家で宿題をするけれど、たまにちがう所でやると楽しいです。ママがずっととなりにすわっていてくれるので、分からないところがあると、すぐに質問が出来ます。家で宿題をすると、ママは家事でそがしくてずっと私のとなりにすわっていられません。一人で宿題をしていると、分からない事もでてくるし、つまらなくてさびしいです。でも、ママと一緒だと分かりやすく説明してくれるので、楽しく宿題が出来ます。

もし日本語の宿題をやらないとどうなるのでしょうか？土曜日に補習校で習った事を全部忘れてしまいます。週に一回しか補習校に行かないので、毎日少しずつ勉強をしないと何も覚えられません。補習校に通わないと日本で体験入学も出来なくなってしまいます。日本のお友達と日本語がしゃべれない事が理由で、遊べなくなるのは絶対

にいやです。何より一番悲しいのはママと日本語で話せなくなることです。

日本語の宿題は本当に大変です。アメリカ人のお友達に日本語の宿題はありません。日本のお友達は、毎日英語の勉強をしていません。でも私はアメリカの学校と補習校の両方に通って、毎日宿題をがんばっているので英語と日本語の両方の言葉を話す事が出来るのです。この作文を書いて、宿題のでこが大変でどうすれば楽しく宿題が出来るのか、改めて気がつく事が出来ました。これからはもっと楽しく宿題が出来ると思います。

20×20

「しか」

ニューヨーク補習授業校　五年一組
ソヴァー　海　トマス

ぼくの家は、森の中にあります。庭にはシカの食べる草や木が生えているので、時々シカはぼくの家のそばにやって来ます。

ぼくは、シカがすがたを現したのに気づいて家の中から見ていると、シカはピタリと動きを止めて、ジーッと見つめ返してきます。ぼくたちが少しでも動くと、しっぽを立て白いおしりを見せて、森のおく深くへかけて行きます。ここに住んでいるシカには、全く近づくことができません。

この夏、ぼくと母は日本に行くことになり、ぼくは母に奈良に行きたいとたのみました。それは、小さいころ家族で奈良を旅行した時に、シカにさわった思い出があったからです。今回、関西方面に行く予定があったので、母はすぐに奈良に寄る計画を加えてくれました。

「やったー」

ぼくたちが奈良公園に向かって歩いていると、お寺の前でシカが一頭出てきて、ぼくたちに寄りそうように歩いてきました。

「うわー」

ぼくは大興ふんしました。

ぼくはシカせんべいをすぐに買って歩き出しました。シカはぼくたちにせんべいをてくれと言うようについて来ます。ぼくはせんべいをあげながら、シカをさわりました。シカの毛はつるつるとしていましたが、からわかく温かでした。ぼくがおどろいたことは、観光客がたくさんあちらこちらにいるのに、シカたちは逃げる様子もなく、おとなしくすわったり、のんびりと散歩をしていたことです。家の周りに住んでいるシカとはずいぶん様子が違って、おとなしく見えました。

ところが、奈良に住んでいるシカ全部がおとなしいというわけではないことがすぐに分かりました。ぼくがある一頭のシカにせんべいを一枚あげました。そのシカはお腹がすい

ていたのか、もうひとつの手に持っていたせんべいを見つけて、「もっ」と欲しいと角をぼくの方に向け攻げきもてきました。幸いにもぼくはそれをうまくかわすことができ、けがはしませんでした。ぼくはこわくなって、せんべいを母にわたしました。

シカは今度、母の方へ近づいて行きました。母は後ずさりをしました。シカは母のシャツにかみつき引っ張りました。母はおびえた様子です。ぼくの心そうは、ドキドキしました。でも、シカが一しゅん、シャツをはなしたそのすきに、ぼくと母はそのシカから逃げました。母も母のシャツも大丈夫で、「ほっ」としました。

その後、ぼくたちは広島の宮島に行きました。そこにもシカがいました。でも、せんべいは売っていません。シカたちは、人に近づいて来ることはありませんが、人間が近づいても逃げて行くこともありません。奈良のシカと比べると、とてもおとなしくて、親しみ

がわいてきました。

ぼくはふだんのくらしの中で度々シカを見ることができるので、シカが好きです。奈良のシカでちょっと怖い経験をしましたが、それでも、ここでは近寄ることも出来ないシカをさわれたことは、とても不思議な感じで、とてもうれしかったです。またいつか日本に行った時にシカに会いに行き、ぼくはあいさつを交わしたいです。

祖母と過ごした時間

W校　五年一組　ハナガン　ジョン

ぼくはこの夏、日本へ行きました。ぼくにとっては四年ぶりの日本行きでした。なかなか会えない親せきに会ったり、日本の小学校へ体験入学、日本の水練学校へも通ったりしました。その中でも特に思い出に残ったのは祖母といっしょに過ごせた時間でした。

日本に住むぼくの祖母は、今年でセハオです。二年前に祖父が亡くなり、今では一人でくらしています。母の姉が近くに住んでいるので時々祖母は母の姉と過ごしているようですが、ふだんは一人ぼっちです。そんな話しを聞いていたので、日本に着く前はどんな風に生活しているのかなと思っていました。年をとっているので、一人ぐらしは大じょう夫かな、さびしくて泣いているかな、あるいは転んでけがをしていないかな、などと心配でした。

大阪で祖母に会いました。祖母は思っていたほど元気がないわけではありませんでした。逆に、祖母は元気一ぱいで、自転車を乗り回し、いろんなところへ出かけていました。ぼくは心の中で「あ、これなら大じょう夫だ。ぼく達がはなれてくらしていてもまだまだ大じょう夫だ」と思えました。

しかしぼくは、母からこんなことを聞きました。

「おばあちゃんね、本当はおじいちゃんがいなくなって、すごくさびしいんだって。誰もいなくなったこの家でひとりで過ごすのはこわくてさびしいみたいよ。ジョン達がいない時は、よくおはかに行ってはおじいちゃんに会いに行ってるんだって」。

祖母はぼく達の前でよく面白いことを言ったり、笑ったりしていました。それはもしかしてぼく達の前では強がりをしていたのかなと思いました。ぼく達が日本にいる間はがんばってさびしいと思う気持ちやなみだをこらえ

ていたのかなどと思いました。

祖母はよくぼく達にコロッケを買ってきてくれました。どうしてコロッケなのかは分かりませんが、祖母はおなかのすいたぼく達のためによくコロッケを買ってくれました。美味しかったです。また温かくておばあちゃんが急いで買ってきてくれたのがよく分かりうれしかったです。体験入学から帰ってきた後ちょっとでかけた後にもおばあちゃんはぼく達のために何か食べるものを買ってくれていました。おばあちゃんはきっと毎日さびしいのだと思います。でもぼく達に食べ物を用意することで、さびしい気持ちを感じないようにしていたのかなと思いました。

アメリカに戻り、ぼくはおばあちゃんのことを考えました。「ひとりで今ごろ何をしているのかな?」と思いました。おばあちゃんはよく独り言をいっていたので、今もひとりで話しているのかなと思いました。

今度はいつ日本へいけるか分からないです

が、また元気な祖母に会いたいです。



20×20

日本とアメリカの学校のちがい

L工校　四年二組
上村　百合愛

今年の夏休みは、日本の小学校で二週間体験入学をしました。

わたしは、日本の学校で体験したことと、アメリカの学校のちがいを書きたいと思います。

日本の学校の夏休みは短くて、七月の終わりから八月の終わりまでで、アメリカの学校の夏休みは六月の終わりから九月の初めまでで、とても長いです。

最初に、日本はとても安全な国だと思いました。なぜなら、朝は子供達だけで分団登校をして、帰りは一

しいです。

給食の時間は、給食当番が食事の準備をしてくれます。食事は、いつも教室でグループ毎に机をくっつけて食べます。アメリカでは、カフェテリアに行って食べます。ランチレディと言う人が食事の準備をしてくれます。わたしは教室でもカフェテリアでもどちらでも良いと思います。

学校の行事でお楽しみ会がありました。わたしのクラスは、バックシュートをしました。バックシュートのルールは、紙とガムテープで作ったボールを後ろ向きで箱の中へ投げ入れます。投げるチャンスは三回あります。他には、たいこの達人や障

人で歩いて下校します。アメリカでは、大人がいなければいけません。アメリカも日本のように、安全な国になってほしいです。

次に、日本の学校では下駄箱でくつを上ばきにはきかえます。めんどうくさいですが、学校をきれいに保つためには良い事だと思いました。

体育の授業の前は、体そう服に着がえます。夏にはプールで水泳の授業がありました。シャワーやプールの水がとてもつめたくて、入る時にしりつもびっくりしましたが、すぐになれました。つめたいプールの中へ入ると、とても気持ち良いので、アメリカの学校にもプールを作ってほ

16×16

宝物コースなどのゲームもありました。校長先生も参加して、とてもも
り上がりました。アメリカでは、み
んなが楽しめるイベントがあまりな
いので、このような行事を取り入れ
るべきだと思います。

休み時間には、校庭で一輪車やフ
リスビーや竹馬やサッカーやバレー
ボールなどの遊びをしました。一輪
車に初めて乗って、友達が手伝って
くれて乗れた時はとてもうれしかっ
たです。

このように、二週間でたくさんの
事を体験しました。アメリカで学ぶ
事はたくさんありますが、もう一度
日本の学校に行きたいと思います。

16×16

自由のゴーカート

W校4年2組
井手俊

エンジンのドドドという音がしんのように思えました。思い切りアクセルをふみこんで最初のカーブを回ったとき、身体がふっ飛びそうな力を感じました。ぼくはむちゅうでハンドルを切りました。

今年の夏、ぼくは生まれて初めてゴーカートを運転しました。ぼくは車には毎日のように乗っています。車の中はせまいです。ちょっとふざけるとすぐにおこられます。乗っている間はぼくにはがまんの時間です。今回、自分で運転をしてみて、こん

なに面白いとは思いませんでした。

こうふんしました。

親の車に乗せてもらうのも、ゴーカートを運転するのも、どこかに移動するという意味では同じでは。でもぼくの気持ちはまったくちがいました。このちがいがどこから来たのかと考えてみました。

ぼくは、自由がそのこうふんを作ったのだと思います。自由があれば、ぼくはどこにでも行けます。急どこへも、ゆっくり行くこともできます。おべて自分で決めることができます。そういう自由を味わったことは、これまで一度もありませんでした。ぼくは、もっと広いコースを自由に走

れたらと思いました。自分で選んだ道を自分の好きなように、何周回ったかも気にせずに。

三年前にアメリカに来てから、自由という言葉は何度も聞きました。特に思い出すのは「自由の女神」です。あの大きな像は、自由を手に入れるために戦ったアメリカの人たちにおくられたと聞きました。自由は人間にとって大切なものだなのだと思います。ゴーカートに乗ってみて、そのことが少しわかったような気がしました。

16×16

わたしの大切なおこづかい

L I 校四年　デック・マン　花

マックスがどうやってわが家の一員になったかのお話です。

二〇〇一年九月十一日お母さんは、会社の仕事でウエストチェスターのお客さんの所にむかっていました。時々世界ぼう易センターの支店のきょうて知り合いと会ったりトレーニングをよくしていました。前の週のオフィスによってトレーニングをしていました。お母さんは色々な友達がいっしょに仕事をしていました。

九月十一日の朝お母さんの友達は、

いつも通りの時間に会社に行きました。でもその夜母の知り合いや友達で家に帰らない人がたくさんいました。お母さんの当時働いていた会社の人が二百九十五人亡くなってしまいました。とても悲しんで母は毎日泣いていて父が困ってしまいました。そんな母に父は生後八週間の黒ねこをシェルターからもらって来ました。あまりにも小さかったのでもらった時は男の子だと言われましたが数週間経つと女の子だと分りました。名前はマックスとスペンサーです。

わたしは、二〇〇六年に生まれました。マックスはいつもわたしのへやの前で待ってわたしがねる時いつ

もいっしょにベッドでねます。大きくなった今でもマックスは小さい頭をまくらの上にのせてわたしといっしょにねます。

マックスは、すずのついた赤い首輪をしています。マックスはモウナ五才のおばあちゃんです。やさしい声をしています。マックスは緑色の目をしています。魚味だけのごはんがすきで「ごはんちょうだい。」と毎朝鳴きます。話しかけるとしっぽを動かします。マックスは昼間まどから外を見るのが好きです。鳥を見るとうれしい声を出します。妹がさけぶとマックスはびっくりしてかくれます。ひもを出すとすっと遊んでい

16×16

ます。秋になるとコオロギを見つけると足をとってわたしのへやにおみやげとして残してくれます。わたしは虫がきらいなので妹を呼んでとってもらいます。そんな時マックスはわたしのベッドの下へかくれてしまいます。

この夏わたしが学校から帰ってきた時お父さんにマックスが、じゅう医さんからガンというしんさつを受けました。わたしはとても悲しくてずっとずっと部屋で泣いていました。

そんな時お母さんはわたしにこう言いました。「悲しいね。でもまだ生きているからおいしい物をたくさんあげて最後まで幸せな生活を送って

あげようね。」わたしは、毎日ごはんをあげてかわいがっています。わたしがピアノを練習している時はベンチの上に乗って待ちます。宿題をしている時でもいすの上ですわって待っています。マックスにはもっともっと長生きしてほしいと思います。わたしはマックスが大好きです。

もっと自国を愛そう日本！！

W校四の二　長岡　優空

みんなが国旗を見ながらむねに手を当てて国歌をせい唱しているすがたを見て大きなショックを受けたのが私のげん地校初日の出来事でした。学校中に何本もの国旗があり、私の住む通りにも国旗をげんかんにかかげている人がたくさんいます。車でドライブしている時もアメリカの国旗を見ない日はありません。その事からアメリカ人は自分の国をとても愛している事が分かります。そして私はそれをとてもすばらしいと思います。

私は日本の国歌の「君が代」の歌

16×16

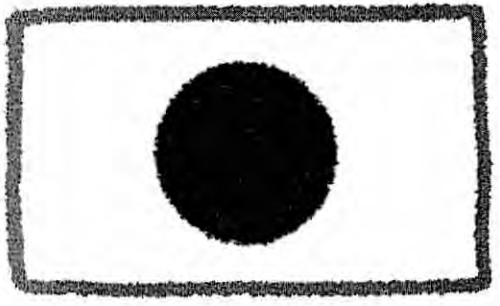
しを正かくに知らないし、オリンピックやお正月以外に日本の国旗を見かける事はほとんどありません。

私が学校に持って行っている文ぼう具や、母が作ってくれるおべん当を見てアメリカ人の友達はきょう味しんしんです。そう言う風に日本には外国人がきょう味を持つみ力的な文化や習慣があるのに、もっとそれらの事を知ってアピールしないのはもったいないと思います。

友達に日本の事を聞かれた時、とてもうれしくほこりに思うけれども、まだアメリカに来て間もないので、英語で思っている事を上手く伝えられずくやしい思いをします。

16×16

TOKYO
OLYMPIC



2020

もっと英語を話せるようになって、日本の文化や習かんに関する知しきを深めていきたいです。そして日本をもっと知ってもらいたいです。

16×16

運動会日記

W校　初等部四年一組

藤本　怜花

運動会の日、私は赤いシャツ妹は白いシャツを着て車に乗りました。ほ習校にむかっていると中、

「今日はお天気で運動会にはぴったりだな。」

と思いました。ほ習校に着いた後中を見渡すと、赤色と白色のTシャツでいっぱいでした。授業は、ちゃんと聞いていたけれど頭は、運動会の事ばっかり考えていました。五分休みの間は、

「赤と白どちらが勝つかなー。」

と考えていました。算数もいつも

16×16

より集中する事が、できませんでした。三時間目が終った後、母と父に妹のクラスの前で合流して外でお昼ご飯を食べました。からあげとおにぎりがとくにおいしかったのでカが入りました。私は運動会が始まる前に自分に

「ぜったいがんばるぞ。」

とちかいました。

私が初めにでた種目は、徒競走でした。列に並んでいた時

「もし転んだらどうしよう？」。

としか考えがうかびませんでした。

私は、三番目に走りました。

「ピプーレ。」

という音と同時に思いっきり走り

回戦は、二組の方が強かったので、一回戦は負けました。けれど二回戦は、一組が少し強くなったので勝ちました。なのでつな引きは引き分けでした。少し残念です。それは三回戦があるとどちらかが、勝つ事ができたからです。

最後に私がでたのは、紅白対抗リレーです。赤、ピンク、オレンジは赤で、白、水色、青色は白です。私はピンクです。初めは、ピンクが一番、青が二番でした。それから一年生の青がピンクを追いこして一番になりました。その後はずっとその順番のままでした。私もがんばって走ったけれども青をぬく事はできませ

だしました。気がつくとゴールテープを一番最初にこえていました。一番になれるなんて考えていなかったので、とてもうれしかったです。ファーストと書いてあるステッカーをもらったので、もっとうれしくなりました。

私が、二番目にでた種目は、台風の目で、四年一組（赤）対四年二組（白）です。最初の方は一組（赤）がリードしていたけれど、と中で追いつかれて、ぬかれてしまいました。初め勝っていたのに負けてしまって悔しかったです。

私が三番目にでた種目は、つな引きです。また一組対二組でした。一

んでした。本当に一位にはなれなかったけれど、自分の中で一位になれたような気がします。

最終的に赤が勝ちました。けれども私はみんなが勝ったんだと思います。なぜってみんながみんなと力を合わせて運動会を作ったからです。そして私と妹にとっての最後の運動会なので妹に

「勝てなかった。」

と思ってほしくないので

「みんな勝ったんだよ。」

と言ってあげました。そうしたら妹は私にハグをしてくれました。

グローバルな親せき

L工校　三年二組
川上　愛

わたしの親せきは、日本と中国の上海とカリフォルニアにいます。そして、今年の夏休みは、みんなに会いました。遠くにいても言葉も通じなくても、みんなつながっています。

カリフォルニアの親せきは、えい語だけわかって、日本語はわかりません。その親せきたちと二週間日本のおばあさんの家で一緒に楽しくすごしました。おばあさんは、えい語がわかりません。でも、言葉がわからなくてもみんなでたくさんわらいました。そして、ふしぎなことに日

16×16

本語がわからないナオミは、「えい語で、「わたしは、人が何を言っているかわかる」。と言いました。わたしはおどろきました。そして、あっと言う間に楽しい二週間がすぎました。

次に、東京から三時間ひ行きに乗って上海に行きました。わたしの家族の中で、お父さんだけ中国語が話せます。そして、中国の親せきは、中国語だけわかります。だから、わたしは中国の親せきと話せませんでした。でも、お母さんは、「人が何を言っているのかわかるよ。ほら、表じょうとか、手の動きを

よく見てごらん」。

と言いました。わたしは、「本当にそうだ」。と思いました。そして、わたしたちは、上海のおじいさんたちと楽しくすごしました。

わたしの親せきは、それぞれがう国にいるけど、みんなの心はつながっています。話す言葉も文化もちがうけれど、みんなでなかよくすごすことができるのです。

アメリカ

W校　三年四組　大庭篤志

ぼくは、アメリカに来て二年以上たちました。

アメリカに来る前、アメリカは自由の国だと信じていました。けれども、くらしにだんだんなれてくるうちに、それが半分うそだと思うようになってきました。はじめてこのけいけんを見た所は学校です。

ぼくは現地校のクラスで算数を習っていました。その時、とつぜん転校生が入ってきました。かれは日本人でした。すると、あんなに転校生を楽しみにしていたクラスメートたちの目つきが変わりました。なぜか

16×16

というと、転校生が白人なら、かれらは友だちをふやせるからです。ぼくは、この転校生が自分みたいに感じて、はずかしく思いました。

ほかにも、テレビで白人のけいさつかんが、なにもしていない黒人にピストルをむけたりしています。

このように、人しゅさべつはいつもひそかにどこかでやられているのです。

けれども、いろいろな人しゅがいっしょに集まるのは、いいことでもあるのです。たとえば、一つずつの国が分かれて楽しくサッカーをしたり、自分たちの文化を教えたり教わったりできます。みんなが二のよ

うなことを楽しいと気がつけば、ちがう所から来た転校生もかんげいされたり、人しゅさべつもなくなるかもしれません。

後二年くらいアメリカにいるけれど、たくさんアメリカ人の友だちを作って、自分の文化を教えたりして、なかよくしたいです。そのためにはえい語をもっと勉強して、自分からアメリカ人の中に入って行けばいいと思います。

16×16

まほうの手紙

L工校　三年一組　阿部　大地

夏が終わりかけた、あるすずしい夕方のこと。ぼくが家に帰ると、お母さんが

「いいこと、あったよ。」

と、言いました。そして、うれしそうに一通の手紙を見せてくれました。細長いのうとうに明るい黄色で楽しいもようがたくさんえがいてあって、見るだけでモリモリ元気がわいてきそうです。

「さとしさんだ。」

と、ぼくが言うと、お母さんがにこにこうなずきました。

それは、きたむらさとしさんと、

もとこさんからのお手紙でした。二人は、日本にいるぼくの大切な友だちです。世界中の子どもたちのために、絵本を作るお仕事をしています。さとしさんは、まほうの手を持っています。

ふうとうをそっと開けると、小さな動物園が、小さな水族館が、小さなはく物館が、小さなびじゅつ館が、次つぎにとび出してきました。去年の夏の思い出が、パッチン、パチンと頭の中ではじけました。いっしょにお出かけしたこと、暑い日、やさしかったこと。

お母さんがお手紙を読むと、やわらかい言葉が音楽のようにぼくの中

16×16

に流れこんできました。ぼくの心はどんどんいっぱいになって、ぽかぽかあたたかくなって、むずむずくすぐったくなりました。ぼくはもう、顔が曲がりそうなくらい二コ二コして、じっとしていられなくなって、くるくるおどりだしてしまいました。

「まほうの手紙だね。」

と、ぼくが言うと、

「そうだね。」

と、お母さんがわらいました。

遠い所に住んでいる、大好きなお友だちに本当に会えたような気がして、とてもうれしかった。お手紙っていいな。ぼくもきっとお返事を書くからね。

一人っ子旅行

W校　三年四組　武神恵実

わたしは、車の三人分のせきに一人でね転がっていました。ね転がれて、気分がいいと思いました。はじめて、姉二人がいない、わたしと父と母だけの旅行でした。

二時間かけて、タングルウッドの広い草原に着きました。わたしは、この「一人っ子旅行」を、前から楽しみにしていました。なぜなら、姉とけんかをしなくてすむからです。

父と母とわたしの三人で、草原でピクニックをしました。この日は七月なのに少し寒くて、雨がふったりしていたけれど、運よく、雨にあわず

においしい昼食を食べられました。
それに、デザートのスイカもじゃんけんをしないでたくさん食べられました。わたしは、うれしい気分で、草原を走り回りました。でも、そのとき、急にさみしくなったのです。なぜなら、姉がいたら、いっしょに走り回れたからです。
けれども、次に、色々なが、きをふいたりひいたりできる場所で、チェロやバイオリンやドラムを体けんしているうちに、さみしさをすっかりわすれていました。チェロをひいたときは、はじめてなのにきれいな音が出て、うれしくなりました。
その後、チェロのカルテットをき

きに行きました。わたしの心に一番のこった曲は「ユーモレスク」です。わたしは、たった四つのチェロだけで、こんなにきれいなえんそうができることに感動しました。

姉たちをわすれるほど楽しい「一人っ子旅行」でした。でも、もしわたしが一人っ子だったら、ほかにも子どもがいてほしいと思うかもしれません。なぜなら、わたしは家族みんなが集まって、いっしょにトランプをする旅行も大すきだからです。けれども、やっぱりもう一回くらいまた、「一人っ子旅行」に行ってみたいなあと思います。

16×16